

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「CARENET Way」として5つの目標を掲げている。事業所全体の理念として「グループホームすざかの認知症ケア」で「認知症があってもずっとその人らしくいられる居場所を目指して」と謳っている	法人経営理念、CARENETWay5つの約束、活動目標等についてはホーム内に掲示し来訪者の目にもふれるようになっている。認知症があっても一人ひとりの利用者が馴染みの場所で最期の時まで生活していただけるよう職員が気持ちを一つにし支援に取り組んでいる。職員は理念の持つ意味を良く理解し日々の業務に当たっており、毎日の申し送りの中できめ細かく確認し合い利用者一人ひとりに接している。家族に対しては理念や日々の取り組みについて面会時等に話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で、地域の行事もほとんどが中止となり交流ができなかった。地域の広報誌や情報の配布はしていただいている。時折敷地内に散歩に来る保育園児とはガラス越しの交流をしている	法人として区費を納め回覧板も回していただき地域の一員として活動している。コロナで中止となっているが、例年であれば年数回、地域公開講座を開催し、介護だけでなく地域の健康拠点としての発信を行っている。新型コロナの影響を受け地域の行事が全て中止になっているが収束後には保育園や小学校との交流活動、文化祭への利用者個々の作品出品や見学にも出掛ける予定である。また、各種ボランティアの受け入れも再開し利用者との交流を行う予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2年前まで「地域公開講座」として情報発信の場を設けていたが、コロナ禍で現在は中止している。コロナが落ち着いたら再開予定である		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍でここ2年ほど会議を開催できていない現状。ケアネットの広報誌を直接お届けし、読んでいただくようお願いした	新型コロナの影響を受け対面での会議が開けない状況が続いているが、管理者が毎月発行されるお便り「ケアネット長野だより」を会議参加メンバーに直接手渡しご意見を頂くよう心掛けている。また、コロナの感染レベル低下を受け、今年度中に1回は家族会も兼ね運営推進会議を対面で開催する予定を立てている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	密とは言えないが、必要時には連絡取り合っている。運営推進会議が開催できなかったのではなかなか機会が持てなかったが、終末期を迎えていた入居者様の状況等報告をしたことはあった	市高齢者福祉課とはコロナ感染対策を始め様々な事柄について連携を図っている。地域包括支援センターとは入居希望者についての相談や連携を図っている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し職員が対応している。市の介護相談員の来訪も2~3ヶ月に1回あり利用者とは交流している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については「不適切なケア」の段階からチェックしていくように意識しており、現在身体拘束にあたるケアはしていない	介護方針として拘束のない支援に取り組んでいる。特にスピーチロックや行動の制限については意識をし気をつけている。裏口の非常扉のカギを外して外に出られる方がいるが本人の行動を見て職員が付き添い安全確保に繋げている。利用者の動きを察知し介助の手助けになるようセンサーを使用している方がいる。3ヶ月に1回身体拘束適正化委員会を開き、拘束の弊害や拘束につながる不適切ケアを行っていないか検討している。	

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待とは何か、何故禁ずる必要があるのかを含め資料を用いた研修やケアの検証を行い防止に努めている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居施設であることもあり、職員が直接制度に触れる機会はほとんどないためあまり理解しているとは言えないが、必要がある方には制度を紹介し利用の案内ができる準備はある		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約に関しては、入居が決まった方にはできるだけ事前に規約書を渡して目通していただき、入居時に時間をかけて説明するようにしている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年1回の家族会は2年間見送りになってしまっているが、面会や電話連絡の時など、要件を伝えるだけでなく、ご家族の声が聞けるようコミュニケーションを心がけている	意思表示の難しい利用者があるが家族から聞いた情報を参考に、普段の様子からも思いを受け止め、要望に沿えるよう取り組んでいる。家族の面会はコロナの影響を受け自粛状態が続いていたが、感染状況の落ち着きを見て、ワクチン2回接種済みとマスク使用を条件に11月より事前に予約を頂き、対面での面会を再開した。また、ホームでの様子は毎月発行されるお便り「ケアネット長野だより」でお知らせしている。合わせて、毎月預り金の確認のため来訪される際に口頭で日々の様子を細かく話し喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のケア会議の時、運営に関する意見や提案を出せる機会を取っている。他に年2回人事考課に併せて個人面談を実施。それ以外でも日々の申し送り時など職員の声はなるべく聞くよう心がけている	月1回夜勤職員を除き全職員が出席の上ケア会議を行い、運営面の話し合い、カンファレンス等を行い、業務内容の効率化に繋げている。また、人事考課制度があり、年2回、目標に対しての自己評価を行い、管理者による個人面談も行われ、普段の困り事や人間関係等について話し合い、働きやすい職場環境を整えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	面談、ストレスチェック等職員の声を聴く機会を設けたり、給与・休暇等職員サイドからの労働条件に関する声には耳を傾けるようにしている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	キャリアパス制度の導入に必要な研修の受講や資格取得の指針は設けていたり、研修にも参加できるようにと思っはいるが、コロナ禍で機会が減ったり、人員配置の関係で、思うように実施できていないが現状		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所GH連絡会に参加し、研修などの情報をいただいて、参加した研修もあるが、コロナ禍ということもあり、職員レベルでの交流は、ほとんどできていない		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にはできる限り顔を合わせる機会を取ったり見学して頂き不安なく入居いただけるよう配慮している。また、家族・ケアマネジャー等からの情報も得るようにしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の声にもしっかり耳を傾けるように心がけているつもりであり、思ったこと、不安なことは遠慮なく伝えてほしいとお願いしている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申込書の入居希望理由を確認し、入居に至る過程で、何に困っているのか、何を解決したいのかを把握するようにしている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一方的な「してあげる」介護から脱却し、生活の主体が入居者であることという視点へ、職員の意識を修正しつつ日常的な関わり方を検討している		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍でなかなかご家族の面会もままならなかったが、電話連絡の機会などできるだけ近況を伝えるよう心がけたり、必要に応じて受診時出席するなどコミュニケーションを図っている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍前は理美容や買い物などなじみの関係を考慮した外出や、親族・知り合い等の面会等も推奨していたが、ここ2年程は困難であった	基本的には友人、知人の面会は自粛していたが徐々に緩和している。10月に少人数で「山田温泉」の足湯に出掛けた際、親戚の方に何十年ぶりで再会することができ喜ばれた一幕もあり、職員も感激したという。また、コロナ対策を十分にし月に3回位自宅に帰られる方もいる。年末に向け職員が寄り添い手作り年賀状を作成し家族に発送する予定がある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係づくりができるよう、職員が介在した会話等にも努めてはいる。思いがけないところで関係性が見えることもあるが、日常的には難しいところもある		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ケースとしてほとんど無いが、ホームで逝去されたご家族と折に触れて話すことはまれにあった。最近ではコロナでそれも難しい		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言動や生活の様子などから、その人の心理や状態を推し量るよう努めている。単純に表に現れている言動だけでなく、背景となる心身の状況を考えるよう職員にも伝えている	利用者一人ひとりと話をする時間を大切に、ホールでも気軽に世間話ができるよう環境作りに配慮し、利用者一人ひとりの思いを受け止めるようにしている。日々の気づいた言動等は介護日誌に纏め、毎朝の申し送りで確認し合い意向に沿えるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の情報やご家族からの情報を得るように心がけていたり、日々の会話の中から把握しようと努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する方等の現状の把握に努めている	職員間で情報共有するよう努めているが、職員全体で、その人の有する能力を評価する視点が統一されていないと感じられるところもある		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	朝夕の申し送りに時間を割き、職員間の情報共有に努める中で、柔軟に対応できるようにしているが、月1回のケア会議では全職員で、入居者それぞれのケアの方向性については確認している。家族には現状と取り組みを説明し声を聞いている	職員は各1名の利用者を担当し、家族との連絡、居室管理をしている。毎月のカンファレンスで全利用者の状況を共有し、ケアマネージャーがプラン作成を行っている。家族とは常にきめ細かく利用者の状況について話をするよう心掛けている。ケアプランの長期目標は1年とし、状況に変化が見られた時には随時の見直しを行い、利用者一人ひとりに合った支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は、それぞれのケース記録に記載し他に「介護記録」「バイタルチェック表」「チェック表」「情報共有ノート」等を用い、日々の出来事や健康状態他情報を共有できるよう工夫している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期の薬の受け取りやお小遣いの補充等家族の役割分担は求めているが、家族や本人の状況等に応じて、一律化するのではなく柔軟に対応している		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ここ2年弱はコロナの影響で地域へ出たり、交流することができない状況であったが、本来は地域と交流し「グループホームに住んでいる方」として認知していただきたいと思っている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	それぞれの身体状況に合わせ、往診可能な地域の開業医さんを主治医とし、連携票を用いて情報提供を密にしている。要所要所では家族と職員が一緒に付き添い受診している	入居時に利用医療機関についての説明をしている。現在緊急時に往診可能なかかりつけ医を主治医とし、基本的には家族が受診対応をしているが家族が遠方の場合ホームで対応している。コロナ禍でもあり2~3ヶ月に1回、薬の処方のみでの対応のケースもあり、管理者と職員とで対応している。また、重要な説明がある場合は家族と管理者が共にかかりつけ医に同行している。歯科については必要に応じかかりつけ医に受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪看ステーションとの契約で週1回の定期訪問と緊急時の対応、医療保険併用の終末期の対応等連携は取れている。コロナ後の運営推進会議再開時には参加メンバーとしても予定している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ここ2年以上入院のケースは無いが、入院時はケアマネジャーからの情報提供や可能な限り主治医の紹介状をもらうようにしている。入院中・退院時のカンファレンスにも出席している。医療的な処置が終了の時点でできるだけ早期に退院できるよう支援している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時「重度化した場合の指針」について示し、GHとしての基本的な姿勢や体制について説明している。その後、機会に応じて終末期の意向を具体的に確認したり、看取りを希望される場合はステージに応じて繰り返しご家族の意思確認を行っている	重度化した場合の指針があり、利用契約時に説明し同意を頂いている。折にふれ、終末の意向の確認はしているが、医師が回復の見通しは無いと判断した時点で、家族、医師、訪問看護師、ホームで話し合いの場を持ち、家族の意向を確認の上、医師の指示の下、改めて「看取り介護」の同意書にサインを頂き看取り支援に入っている。直近の3年半で6名の方の看取りを行い、他の利用者も最期のお見送りをするなど、心の籠った看取り支援をしており家族からも感謝の言葉を頂いている。また、看取り後には訪問看護師にも加わっていただき振り返りの機会を設け、次回に繋げるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	基本的な応急処置や初期対応の研修はあるが入居者それぞれの緊急時の対応について、家族の意向を確認しながら、適切な対応ができるよう情報共有している		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	施設全体での消防計画や避難計画があり、年2回の避難訓練も実施しているが、特に夜間の水害時の体制には不安もあり、今後地域との連携が課題であると考えている市の福祉避難所として登録している	年2回、6月と10月に消防署員に参加をいただき防災訓練を行っている。日中想定の方火災避難訓練を行い、利用者全員玄関前に移動しての消火訓練などを行っている。合わせてAEDの使い方研修も行っている。備蓄として食料品が3日分準備されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	立場上職員の言葉がけが人格否定・人権侵害なりやすいことは職員に周知している。職員同士、お互いが緊張感をもってチェックしあえるよう求めている	どうしたいか、何をしたいか、利用者が納得して行動に移れるような環境づくりに意識し取り組んでいる。言葉遣いには特に気配りし命令口調にならないよう全員で日々の支援に取り組んでいる。声かけは基本的には苗字を「さん」付けで呼び、同姓の方がいる場合は名前で行っている。入室の際には利用者の許可を得て入室するよう徹底している。マナーや虐待防止の研修会を行い意識を高め支援に当たっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者との会話の中から思いを拾えるよう努めている。毎月の「目標」を自分で決めていただく試みも続けており、ホワイトボードに書き出したりカードを作り、日常的に取り組めるよう支援している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々のスケジュールの大枠以外のところで希望に沿うということまでは難しい。少しずつではあるが就寝時間や午睡など、それぞれの過ごし方があることは理解して支援できるようになってきた		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	できるだけ着たいものを着てもらえるように考えた対応ができて入居者もあるが、適切な衣類を選べない入居者等への対応は職員目線になりがちである。身だしなみは共有スペースに入る時など適宜声がけし意識してもらう		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	できる方には調理の下ごしらえを手伝ってもらったり、バイキング形式を取り入れたりしている。下膳に関しては半数以上の方ができるようになってきた	殆どの利用者が自力で食事が出来る状況である。家庭的な献立に心掛け、法人の栄養士より献立コメントも頂き、職員が1週間分の献立を立て調理し提供している。コロナ禍で外食が難しい状況が続いているが、バイキング形式を取り入れたり、デッキに出て食事をしたり、行事に合わせ、敬老会には回転寿司をテイクアウトしたり、時折、「カップラーメンの日」を設け数多くの種類を準備して好きな物を選んでいただき楽しんでいる。また、お手伝いも「もやしの芽取り」を始め野菜の下処理等に積極的に参加していただき、全利用者が、毎回、自分の食器の下膳をしキッチンまで運んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取は食事時の他、午前午後とお茶の時間があり、いろいろな飲み物をお出ししている。特に排便に困難のある方に声がけして多く飲んでいただく等個々の状態に合わせ対応している		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、居室へ戻ったタイミングで口腔チェック 口腔ケア介助等、その方に応じた対応をしている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄が完全に自立されている方以外は、それぞれの状況に応じて関わりを持ち、できるだけトイレで排泄できるよう支援している。完全に定時のオムツ交換の方は居ない	自立の方は若干名で、大半の方が一部介助という状況である。職員は一人ひとりの状況を把握しており、タイミングを見て声掛けを行いトイレでの排泄に繋げている。また、一人ひとりの状況は介護日誌の中の排泄表に記録として残し、職員同士情報を共有し気持ち良く過ごしていただくよう心掛けている。お茶を中心に牛乳、ヤクルト、ヨーグルト等で1日1,000cc以上の水分摂取にも取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便についてはチェック表を用いてチェックしており、それぞれの方のに応じた予防に取り組んでいる		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	浴室の浴槽を、普通の家庭の浴槽に替え、リニューアルした。安全に、怖さを感じることなく入浴できるようになった。一応、入浴のスケジュールはあるが、毎日実施しているので、多少の融通はきく。ゆっくり入ることはできている	全利用者が何らかの介助が必要な状況である。入浴に際しては浴室担当職員1名と1名の移動・脱着担当職員を配置し安全な入浴確保に努めている。入浴拒否の方がいるが、誘い方に工夫をして入浴していただくように努めている。「菖蒲湯」「ミント湯」「よもぎ湯」等を行い、季節感を味わっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室のレイアウトや寝具など、なるべくその人の生活習慣に合わせるようにしている。冬は、電気シーツや湯たんぽ等を使用する方もある。居室にはリクライニングチェアやTVも設置している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理表を用い、利用者ごとに処方された薬用途・用法を把握している。服薬支援は何種類かのチェック表を用いチェック、状態の観察は外用薬も含め日々確認している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	モップ掛けやゴミ出し、食器洗い、新聞たたみ、洗濯たたみ、食器洗い、等それぞれできそうなことをお願いしてやって頂いている。時間が取れるときは嗜好に合わせたゲームや読書、歌など取り組めることを提供している		

ケアネットグループホームすざか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍でここ2年近くは最低限の外出のみ。最近少しずつ外に出かけるようになっていく。家族との外出については、コロナの最蔓延期を除いて、条件付きで了承していた	外出時、自立または手引き歩行の方が三分の二、車いす使用の方が三分の一という状況である。天気の良い日には外に出て外気浴を楽しんだり、近くの同じ法人の健康センターまで散歩したりしている。コロナ禍であるが10月には「山田温泉」の足湯に出掛け楽しいひと時を過ごしたという。コロナ収束後には積極的に外出したいと思っている。花見や買い物、スーパーのフードコート等に出掛けたり、日常的な外出を心掛けたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を使うことは、社会生活の大事な要素だと認識しているがなかなか自分で使う機会はなく、扱っているお小遣いで、生活用品や嗜好品を、代行購入することが多い。出掛けた時や医療機関では自分で支払するようにしている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自分から電話を希望される方は現在余り居ないが、掛かってきたときは話してもらおうと人によってしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温や湿度は温度計等でチェックしている。自分で作った制作物を飾ったり、引き伸ばした写真を張り出したり、西日の強い時期は西側の窓にシェイドを掛けるなどしている	陽当たりの良い共用部分で世間話を楽しまれている利用者を微笑ましい気持ちで拝見した。掲示板にはお便り「ケアネット長野だより」が掲示されており活動の様子を窺うことができる。また、廊下の壁一面に敬老会の様子や漬物を漬けている様子、外出で山田温泉に出掛けた時の様子等が数多く写真で飾られ笑顔で楽しい日々を送っていることが見て取れた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間では、それぞれの居場所が自然と定着しているが、他にソファや、共用の椅子を置いて、自由に移動できるようになっている。定着している空間では、それぞれの個性による関係性が見られる		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものを持ち込んでほしいと家族にはお願いしているが、備品的な物は備え付けでほとんど用が足りてしまうので、寝具や衣類、家族の写真等が多い。習慣や身体機能によって、居室のレイアウトを変えたりはしている	各居室の入り口には利用者が作った「団扇」等の作品が飾られている。掃除が行き届き整理整頓された居室にはトイレ、洗面台が設置されている。合わせてリクライニングを備えたイスや机、テレビ等も標準装備され、暮らし易く優しい造りとなっている。そのような中、家族の写真やご自分の作品に囲まれ思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	最近、各居室には必ずカレンダー・見やすい時計を掛けたり、自分で判断したり考えられる環境づくりを心がけている。それぞれの能力を生かした家事や役割をお願いするなど、できることを生かそうと努めている		